



平成 21 年 7 月 11 日発行 No. 31

器を育てる

日本の伝統工芸について、一緒に考えてみませんか？
ブランドロジスティクスでは、この度「器を育てる」プロジェクトを始めます。
器を育てる、それは単に伝統工芸品の容器（いれもの）をつくることではありません。

器 = わたし

「わたし」の生活スタイルを軸に、新しい教養や体験を「わたし」の内側に取り入れていくこと。「わたし」が学ぶことで、日本の伝統を今の「わたし」に活かす器量に育つこと。つまり、「わたしの器」を大きくしていくこと。

器 = わたしから広がる 縁

「わたし」の暮らしに生きる、「わたし」が日々愛しんで使う器が、「わたし」が生きてきた証として、家族に伝えていくことのできる「わたし」の財産となること。家族みんなで共有できる暮らしの価値づくりを目指すこと。
また、つくり手と「わたし」とをつなぐ縁を築くこと。

このプロジェクトでは、まず「わたし」という器が育ち、縁というつながりの器が育ち、そして最後に、その証として形ある器が手元に届きます。
そこにある価値は、目利きや鑑定家が決める価値ではありません。
「わたし」と家族、つくり手と買い手、それぞれがお互いを思いやる気持ちが生み出す新しい価値なのです。
伝統に、今、「わたし」という新しい価値が加わります。
いわば、このプロジェクトは、産地や作家のブランドを持つ、買うのではなく、「わたし」（と家族）のブランドをつくっていく **パーソナルブランディングプロジェクト**です。

私たちブランドロジスティクスはブランドの会社ですが、今回のプロジェクトは産地や地域のブランドをつくる、というプロジェクトではありません。
あなたを、そしてあなたの家族をブランド化するプロジェクトです。
この新しいプロジェクトは、今後いろいろなかたちで展開していきたいと思います。
私たちの考え方にご賛同いただけます方を募集します。ぜひご参加ください。
どうぞよろしくお願いいたします。

なぜ、日本の伝統産業は私たちの今の生活から遠いのでしょうか？

私たちは、今日の日本の伝統産業は以下のような問題を抱えていると思っています。

1. 買い手にとっての問題

1) 日本の伝統工芸品は博打的な存在 ??

伝統工芸品を買う時の気持ちを想像してみてください。あなたは、心のどこかで「だまされるのでは？」、「ぼられるのでは？」、と思っていませんか？だからこそ、「なんでも鑑定団」という番組も成り立っているのではないのでしょうか。イタリアの家具やイギリスの陶器も、昔は同じような感覚だったかも知れません。でも今では、随分安心して買えるようになりましたね。日本の消費を牽引しているといわれる、いわゆるアラフォー・アラフィフ世代に、離れた国のものの方が、国産のものより信頼されているという事実が、一番の問題といえるのではないのでしょうか。

2) 日本の伝統工芸品は、家族で価値をシェアできない ??

現代の私たちの生活の中で、イタリアの家具やイギリスの陶器、チェコのグラスなどはかなり身近な存在です。リーデルのワイングラスを買うことを家族から大反対されることはあまりありません。欧州の伝統工芸品は「クリスマスに記念のプレートを買う」「赤ちゃんが生まれたら銀のスプーンを贈る」など、家族と共に歩んでいます。一方で、日本の伝統工芸品を買うといったら、どうでしょうか？例えば、お父さんが買った伝統工芸品は、実は家族の間で道楽といわれてはいませんか？残念ながら、日本の伝統工芸品は骨董品のように、買い手個人の道楽の域を超えていないといえるのではないのでしょうか。

2. つくり手にとっての問題

1) 産地が抱えている横並び体質や閉鎖的な体質がネックになっていることはもはや周知の事実

この話題は、あえて触れるまでもなく皆さんご存じですので割愛します。

2) 産地に尋ねても、お客さまに対して「これはうちではできない」という話しかできない

産地の方に東京のお客さまの生活から出てくる希望をお話すると、すぐに「うちではできない」という言葉が返ってきます。結局、否定的な話に陥りがち…残念ながら、ひとつの産地だけで、お客さまの暮らしの価値を満たすことは稀です。お客さまの“暮らし”にとって重要なのは、産地のモノを所有することではなく、“暮らし方”(お客さまにとってのテーマ)に見合う道具になれるかどうか、なのではないのでしょうか。

3. 売り手にとっての問題

1) 伝統工芸品の価値は目利きにしかわからない??

「なぜ高いのか」「なぜ安いのか」をお客さまにわかるよう、科学的な説明もできる売り手が、残念ながら少ないことも現実です。「なんでも鑑定団」で偽物が出てきた時、鑑定家の先生方は、「本ものはもっとタッチが力強いんです」とか、「構図がもっと大胆なんです」とか、目利きでなければわからないコメントをおっしゃいます。目利きがいつもあなたの傍らにいたとは限りません。伝統工芸品の価値を決めるのが目利きだとしたら、目利きになれない人や、目利きに出合えない人はお客さまにはなれませんから、市場規模は大きくなりませんよね。

2) インダストリアルプロダクツなのだから時代が変わったことにもっと敏感であってほしい

伝統工芸品も工芸品（インダストリアルプロダクト）です。ですから過去の時代と比べて、技術の進化により、技法も作り方も変遷しています。また、材料の調達や価格も変遷しています。何が高くなって、どこがコストダウンできるのか、その点こそ、お客さまが知りたいポイントのはず。売り手側には、●●産だからよい（高い）または、●●産なのにこの価格（安い）、という説明だけではなく、その他のインダストリアルプロダクツ同様に、技術、素材、技法についても、どう変化しているのかをお客さまに説明してほしいと思うのです。

こうしたら「わたし」たちとの距離が縮まるのではないのでしょうか？

器を育てることは、
伝統工芸を「わたし」たちにオープンなものにしていくこと
「わたし」たちを伝統工芸に対してオープンにしていくこと

日本の伝統工芸品産業に共通している問題とは、【閉じていること】。

買い手は個人の趣味の中で、つくり手は産地の中で、価格は目利きの中で、閉じてしまっていると思うのです。

この閉じていることが、市場縮小のいちばんの要因なのではないのでしょうか？

だから、私たちは「オープン」にしたいのです。

つくり手も買い手もオープンな関係の中で、新しい器をつくりたいのです。

「器が育つ」プロジェクトは、つくり手、お客さま、サポーター、皆がオープンに学び合い、新しい価値をつくっていかうとするプロジェクトです。新しい価値をつくるために、以下の方針の下で進めていきたいと思います；

方針 その1 お金は大事だよ〜♪

- ☐ 値札（人がつけた値段）に頼らず、自分にとっての価値に見合うものを「適正な価格」で買う。
- ☐ つくり手側の手間と気遣いや愛情の量 = 価値 = 値段と考える。
- ☐ 大事に使い続けること、どうすれば買ったときの価値を落とさないか、そのためのメンテナンスもきちんと考える。
- ☐ 適正な価格で買い、またリセールができるよう、科学的に判断できる知識を積む。器ができるまでの工程とそれを行うことの意味を理解し、良いコストダウンと悪いコストダウンを見分けられるようになる。お金のかけ方（どこにこだわるか、どこをあきらめるか）を判断できるようになる。
- ☐ 安物も高級品も一見ではわからないこともある。何が違うのか、経年で現れる違いについて、きちんと理解できるようになる。

方針 その2 「わたし」が残す家宝

- ☐ 器を買うだけでない。オーダーするだけではない。「わたし」が器をプロデュースする。
- ☐ つくっていく過程を、つくり手と「わたし」、そして家族の間で共有していく。
- ☐ 「伝統」は極論を言えば、「わたし」とは直接は関係ない数字の歴史。私たちが大事にしたいのは、「わたし」と家族とで刻んで行くパーソナル・ヒストリー。
- ☐ 「わたし」にとって関係のある時間の積み重ねだから、「わたし」が生きてきた証として家族に残す。

方針 その3 「わたし」の暮らしが美しくなる

- ☐ 今まででは器は、産地やメーカーで選んできた。これからは「わたし」の生活の「テーマ」で選ぶ。
- ☐ これからは、「テーマ」のある美しい暮らしを送りたい。
- ☐ 大好きなものを、いつも使う、大事に使う、ずっと使う。ファーストやインスタント、消費する生活から、慈しむ生活へチェンジする。

方針 その4 「わたし」とつくり手との直接交流

- ☐ よいつくり手との最初の出会いはサポーター^{*}がコーディネート。最初の「わたし」の器が完成した後は、両者間で直接にお取引。
- ☐ 器によって暮らしが変わる。新しい暮らしに合わせて、さらに新しい器を適正な価格でつくる。
- ☐ 「わたし」の器は毎日使って、長く使うもの。だから、時に修理が必要になることもあります。そんな時には、ここでの出会いを活かして、つくり手さんにお願ひしましょう。
- ☐ 正統な手数に正当な対価を支払う。お互いを尊敬し、お互いに相手のことを思いやることのできる値付けができる。そんなスマートな関係を構築する。

^{*}サポーターの役割： 今回のプロジェクトの1 番目の主役は「わたし」つまり参加者です。2 番目の主役は器をつくる職人さん達です。サポーターは事務局としてこの両者がよい縁で結ばれるようバックアップします。

方針 その5 伝統工芸をもりたてる

- ☐ 「伝統」、「産地」という軸ではなく、お客さまの生活の軸で発想し、伝統工芸のプレゼンテーションの幅を広げていく。
- ☐ 産地全体は救えないが、頑張っているつくり手のサポーターになることはできる。
- ☐ 最初に製作費の半分^{*}を支払うことで、つくり手側のファイナンスを助ける。
- ☐ つくり手との直接交流により、つくり手はお客さまの生活について学ぶ。
- ☐ 単につくり手と、「わたし」が仲良くなるだけではない。お互いに厳しくチェックし合うからことで真のよい関係を築く。

^{*}製作費の半分： つくり手側での材料費の購入に充てられます。

伝統に合わせるのではなく、「わたし」の暮らしに合わせる器。そういう楽しみ方から、まず始めてみませんか？

器を育てるプロジェクト 第一弾 一日の始まりだから、しあわせをいただく

器を育てるプロジェクトは、自分の生活の価値に合った日本のよいものを使っていこうという、いわば生活テーマ（わたしのテーマ）主導型のプロジェクト。これから、いろいろなテーマを掲げて展開していきたいと思います。

第1回目のテーマは「一日の始まりだから、しあわせをいただく」。

起きたら、とにかく秒刻みで支度して、仕事に GO!
昨日の落ち込みや怒りなどの負な気持ちを引きずって、口をへの字にしたまま家を出てしまっている…
そんな毎日から脱却したいと思っていませんか？
一日の始まりだからこそ、毎朝ハッピーな気持ちで始めること、それを大事にしたい。
だから、淹れたてのカフェオレ、熱々のスープや御味噌汁、器からたつ湯気と香りで、しあわせな気持ちもいただきます。ちょっと早く起きて、お気に入りの器でゆったりと、おいしいカフェオレ（スープや御味噌汁）を淹れて、味わう。
そして食後のお皿を放置することなく、仕舞い、仕事に出かける。そんな朝の暮らしを送ろうというのが、今回のテーマです。

今回セレクトした器は、輪島キリモトの漆器のお椀（ボウル）。輪島塗りというと、きらびやかな美術品を思い浮かべる方も多いと思いますが、輪島キリモトの器は普段使いのシンプルでタフなデザイン。両手で抱えて、口をつけていただくという日本の食文化に最もふさわしい器として漆器を選びました。毎朝使う器だからこそ、上品な外観、手に持った感触の心地よさ、口をつけたときのやさしさ、そして何よりも長く愛せる上質さを特徴とする輪島キリモトの器を選びました。



第一回目のパートナー 輪島キリモトのご紹介

輪島塗といえば、千年の歴史を誇り、重要無形文化財として世界的に有名です。沈金、蒔絵など装飾技法が特徴的とされ、まさしく高級品、芸術品が思い浮かぶ伝統工芸品の代表格。その輪島で、輪島キリモト三代目にあたる桐本泰一さんは「伝統工芸の歴史は道具の歴史」をモットーに、普段の暮らしの中で使い、長い間愛着をもって使い続けられる、道具としての漆の普及活動を行っています。伝統産業に身を置かれる方の中で、数少ない「用の美」をしつらえていただけるつくり手のひとりです。そして桐本さんは、東京の人の暮らしを体感しようと東京にも拠点を構え、年間の 1/3 を東京で暮らすようになったアクティブパーソンでもあります。お客さまとの真摯なコミュニケーションを通じて、本物の漆の魅力を広める活動が続けてこられた桐本さんに、今回襟をお借りします。

輪島の漆器ができるまでには、二十を超える工程が必要です。各工程には、木地師さん、塗り師さん、蒔絵師さん、と異なる職種の職人さんの手をたくさん経ます。また漆器といってもその種類は多種多様。輪島塗りの中でも、その塗り方は何種類かの手法に分かれます。

お椀ひとつを取り上げても、本堅地、蒔地といった手法があります。輪島キリモトでは、木地（木を削る作業、家具など）から漆塗りまで独自の工房内で対応できます。さらに工房のある輪島市内に、椀木地、下地、上塗り、蒔絵など協力していただける職人さんたちの強力なネットワークをお持ちです。漆塗り段階で、本堅地、蒔地の両方の手法に対応できるため、漆器ができあがるまでの工程を学ぶにはもってこいの環境です。



器を育てるプロジェクトは、こんな方を対象にしています

以下のようなことを考えることがあったら、ぜひ一緒にプロジェクトを立ち上げてみませんか？

- ☐ 日本の伝統工芸に興味はあるが、詳しいことはわからない。
- ☐ 作家と呼ばれる人にオリジナルオーダーをしたいが、高そうだし、何だか怖そうな感じがする。
- ☐ 器が好きで色々買ってみるものの、結局、統一感なく、テーブルセッティングもインテリアも決まらない…。
- ☐ 子供や孫に何か伝えられるものがあるだろうか、と考える…。
- ☐ 自分が生きてきた証を何か残せるだろうか、と考える…。
- ☐ 適当に買って、適当に使って、結局使わなくなって、引き出しの奥にしまいこむ生活に、最近疑問を感じる。
- ☐ インスタントやファーストな生活に、疲れてきた。(飽きてきた)
- ☐ そろそろ使い捨ての大量消費材には飽きてきた。
- ☐ 安いモノをつくるために、からだにも環境にもよくないモノが溢れ返る社会は嫌だ。
- ☐ からだに良い、安心安全な食や生活に興味がある。

器を育てるプロジェクトが目指すこと

第一弾「一日の始まりだから、しあわせをいただく」では、普段の暮らしの中で慈しめる「わたし」専用の漆器を、「わたし」のためにつくってもらい、製作にかかる時間と工程を通じて、日本伝統の漆器について学びます。

- ① 素材の科学： 木材、布、漆などの素材の特徴を掴む
- ② 製作工程： 漆器ができるまでの作業工程を確認する
- ③ 用の美： 毎日使う器だから、生活の中にある合理性や実用性の美しさを基とした日本のかたち(デザイン)を大切にする

この三つを通して、「わたし」の価値に見合う「器」が選べるようになること、そして手にした器を目減りしない財産として所有していくことを目指します。

漆について — なぜ第一弾で漆器を選んだか

元来漆の器とは、毎日使う道具として、極められた形、素材、仕上げから、現在まで発展してきた器といわれています。漆は水分と結びつくことで固まります。そのため、日本の湿度が高い暮らし、水をたくさん使う暮らしに適した器です。丁寧につくられた漆器は、実は強くて丈夫です。毎日使い、水にふれさせることで、親子何代にも渡る長い期間を現役で活躍できる器なのです。また、天然木を使っているため、熱いものをいれても、冷たいものをいれても持つ手に優しい。口をつける縁部分は、薄く、滑らか、その一方、欠けることのないよう、何重にも補強されているなど、使う人にとって優しい魅力に溢れています。年を経る程に、何とも言えない深みのある風合いになっていきます。それは幾重にもかけられた手間数と技がもたらす魅力と言えるでしょう。

しかし、こんな魅力にあふれた漆器ですが、からくりも多々あり、それが一見ではなかなか見抜けないこともあって、ややこしいカテゴリーに括られてしまうこともあるようです。表面がきれいであっても、中はプラスチック生地にラッカー塗りなのか、木地に本漆を使ったものか、仕上がってしまった後から漆の器を見極める技術はプロでも難しいとのこと。

また職人さんとのコミュニケーションを通して、ご縁(信頼関係)を構築しましょう。

「わたし」ひとりでオーダーできる、完璧な趣味人への道の第一歩は、信頼しあえる作家さんや職人さんを見つけ、そして彼らと交流できるようになること。

今日、伝統産業の職人さんは、頑固で無口で怖そう…残念ながら、そんなイメージがあります。

でも、この器プロジェクトに参画いただく職人さんや作家さんは、輪島キリモトの桐本さんはじめ、皆さん、惜しみなく情報を公開してくださる方ばかり。そして、首都圏に住むあなたがどんな生活を送っているのか、また、送りたいと思っているのか、あなたの気持ちを知りたいと思っています。ですから、お互いオープンマインドで語り合える場で、暮らしの中にずっと生き続けられる、日本のよい器をみんなで育てていきたいのです。

だから、漆器を学ぶことで、日本の伝統工芸品の本当のコストパフォーマンスを知ることチャレンジしましょう。

ところで、漆はうるしの木から採取される樹液です。十年かけて育てたうるしの木から採れる漆は、僅か 150 ~ 200 cc。お椀数個分を塗るだけの量しかとれません。しかも今日の漆(液)の 95% は中国産。国産漆の運命はかなり危うい状況にあります。漆を採る仕事(漆掻き)は、他の第一次産業と同じく高齢化が進み、職歴五十年以上という超ベテランのおじいちゃんばかり。若い後継者も少なく「漆掻きを続けたい」と思う若者がいても、今日の日本では「国産漆」を評価する市場が大きいため、漆掻きだけでは生活しにくいというのが現状なのだそうです。本物の漆器を用いる器として使う人が増えない限り、日本産漆の危機的状況は変わりません。

これから生まれてくる日本人が、銀のスプーンでなく、漆のスプーンをくわえて生まれてくる、といわれるような、そんな世の中になるといいのになぁ…と願います。

第一弾でオーダーする器について



和の器、中でも漆の器の最大の魅力は、手で持ち、器に口をつけて食べたり飲んだりするその時に発揮されます。熱々のスープやコーヒーも、反対にキーンと冷えたお酒も、中身の温度に関わらず持つ手にやさしい器です。そして、器の縁に唇をふれたときの滑らかな感触と、器の中から口と鼻に入ってくる香りを最大限に楽しむことができる器。そんな器が良いと思いました。そこで、両手で慈しめる器、毎日飲むものをいれる器として、カフェオレボウルにもスープボウルにも、御味噌汁をいただくお椀にもなる椀タイプを、最初の器に選んでみました。

色も、まずはスタンダードな黒、本朱、溜、べんがら、うるみの4種類。漆塗りの技法、形、サイズ、色、などを選んでいただくことから始めます。（詳細は、次ページ以降をご覧ください。）

Q. なぜ、用の美？

- A. 今回はいわば、イントロダクション。基礎編です。飾っておく美術品ではなく、毎日使う「用のもの」が「出来るまで」と「使うこと」を学びます。ですので、既に生活の中で慣れ親しんだ（使い勝手が計算された）造形の中から、使う人の手のサイズや召し上がる量で形とサイズを選んでいただきます。自分だけのデザインにこだわる前に、まず素材と工程、そして用の美を学びましょう。

Q. オーダーすると既成品よりどれ位高くなるの？

- A. 今回あなたが支払うお金は既成品の価格と同じです。オーダーするから、高くなるということはありません。また今回の価格には、輪島キリモトに器プロジェクトとしてオーダーするにあたり、あなたが学ぶために、作業のひとつひとつをガラス張りに公開していただく進捗レポート、工程チェック表、カルテ、手数目録などが含まれます。

Q. どんな風に仕上がるのか、オーダーの前にサンプルを確認できるの？

- A. はい。プロジェクトに参加されると、器のかたち / サイズ / 塗りの種類と色を選ぶにあたって、輪島キリモトの東京オフィス・うるしの事務室にて、実際に漆椀を見ていただき、決定していただくことができます。また、プロジェクトへの参加不参加に関係なく、漆器の魅力を体感していただくための、イベント（有料）も予定しています。美味しいお料理とお酒を、輪島キリモトの漆器でいただく会を企画しています。

Q. 既成品とどこが違うの？

- A. 同じ器を、輪島キリモトの器を取り扱っている百貨店や器ショップで購入することもできます。何が違うのか、それは…
- ① 納品までの時間です。百貨店や器ショップでは、気にいった器をすぐに購入できます。器プロジェクトは、オーダーしてから製作しますので、また漆器ができるまでの工程を学び、一つひとつ確認して進めていきますので、納品までに時間がかかります。今回、納品までの時間は仕様確定（15 ページ参照）から約六ヶ月を見込んでいます。
 - ② 輪島キリモトの職人さんが、あなたという人を思い浮かべながらつくってくれます。職人さんがあなたの器であることを認識するために、誰の器をつくっているのかわかるように明確にして作業してもらいます。
 - ③ 各工程をチェックできます。漆ははがしてみなければ完成までにどんな工程をたどってきたのかわかりません。モノの本には、「信用できるお店で買いなさい」と書かれています。でも、信用できるお店はどこなのでしょう？ お店のよしあしを判断するためにも、基準を学ぶ必要がありますね。今回のプロジェクトは、オーダーから納品まで全工程のチェックをすることで、本当にオーソドックスな工程をふみ、器ができるまでを体験します。
 - ④ あなたの器のカルテが工房に保管されます。だから補修時も、追加オーダー時も、あなたのカルテに沿って職人さんが対応してくれます。

器を育てるプロジェクト 第一弾 幸せな気持ちで 1 日始める 概要

今回のプロジェクト第一弾の期間は全部で八ヶ月プラス α (メンテナンスなどのフォローアップを含みます)。
大きく三つのターム、1. 見つめる、2. 楽しむ、3. 愛でるに分けて、進めてまいります。

1. 見つめる

2. 楽しむ

3. 愛でる

1. 見つめる 「わたし」の暮らしに必要な器、「わたし」の暮らしのスタイルって何だろう？

1. 見つめる

2. 楽しむ

3. 愛でる

Step 1

どんなかたちのお椀にしましょう。

今回選んだお椀のかたちは、四種類。
気にいった造形を選ぶだけでなく、どんなテーブルウェアと合わせて使うのか、どんな食器棚に、どんな風にしまって、どんな感じで毎朝取り出すのか、収納形態や生活導線なども考えて選びましょう。

A ヘラ模様椀

オーソドックスなかたちである高台型のお椀です。
お椀の外側は、下地を塗る際に刷毛ではなく、へらを使う手法を活かしています。
少しマニッシュな仕上がりです。



B すぎ椀

逆さまにすると杉の木に似ていることから名づけられたそうです。
モダンでシンプル、手の中にすっぽりおさまるシャープなかたちは、輪島キリモトのラインナップの中でも人気のお椀。



C 端反椀 はぞりわん

ティーカップのようにお椀のふちが外側に開いているため、香りをゆったり楽しめます。
口当たりがよく、とても飲みやすいかたちです。



D 小福椀

サラダなどのお料理をいれるにもちょうどよい、ころんとしたかたちの、かわいらしいボウル型。
飲む器としてだけでなく、食べる器としても重宝します。



Step 2 大きさ、サイズを選びましょう。

AからDまでの器はそれぞれ、大・中・小のサイズがあります。
「たっぷり、なみなみと注いで、ふうふうしながら楽しみたい!」、「手のサイズに合わせたい」、
などを考えて選びましょう。

* 写真は端反碗。手は少し大き目。



サイズ 小

小ぶりの愛らしいサイズです。
女性の両手で持つと、
お碗のほとんどが隠れる位。



サイズ 中

女性の両手で持つと、
お碗の 2/3 ほどが
隠れる位。



サイズ 大

おどんぶり位の大きさです。
女性の両手で持つと、
お碗の半分ほどが隠れる位。

* 外寸の単位： ミリメートル

* 容量の目安： 八分目まで水を入れたときの量

A ヘラ模様碗



小

中

大

外寸	φ113 × H 60	φ121 × H 66	φ131 × H 73
容量	180 cc	230 cc	310 cc

B すぎ碗



小

中

大

外寸	φ101 × H 770	φ116 × H 83	φ133 × H 90
容量	150 cc	220 cc	310 cc

C 端反碗



小

中

大

外寸	φ110 × H 65	φ122 × H 68	φ130 × H 70
容量	180 cc	210 cc	310 cc

D 小福碗



小

中

大

外寸	φ 94 × H 60	φ106 × H 65	φ121 × H 75
容量	150 cc	210 cc	310 cc

Step 3

塗りの技法と色（カラー）を選びましょう。

今回、塗り方は次の二種類の手法のどちらかをお選びいただけます。

本堅地：輪島塗りの伝統的な手法です。なめらかな口当たり、つるんとした肌理が美しい塗りです。

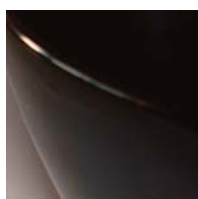
蒔地：ざらとした手触り感が特徴。金属のカトラリーを使っても大丈夫なタフな仕上がりです。
桐本泰一さんが考案した独自の技法です。

ヨーグルトを食べる時にも使うから、金属のスプーンも使うかな… スプーンも箸も、塗りもので合わせて使おうかな…などを考えて選びましょう。また、技法によって色も異なりますので、次の色の選択も合わせて考えましょう。あなたはどんな色が好きですか？ お部屋の中、持ち物、どんなカラーに囲まれた暮らしをしたいですか？そんなことを考えながら選んでみましょう。

本堅地（輪島塗り）

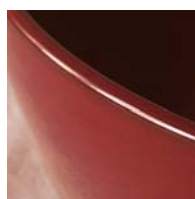
やわらかな艶が特徴的

黒



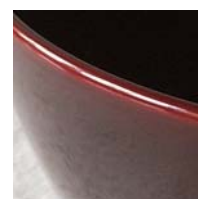
漆黒という言葉があるように、黒の中でも最高の黒といわれる程、美しい艶やかな黒。採れたての漆は透明ですが、漆自身が変化して出来るこの色は、漆でしか表現することができない、何とも美しい色です。

本朱



日本古来の色、朱。漆に顔料をまぜ仕上げる、落ち着いた赤。上品な華やかさのある本朱は、漆器以外のテーブルウェアの中に置いても比較的バランスがとりやすい色です。

溜



下地（したじ）の段階でまず朱を塗り、その上に朱合い漆（精製した上塗り漆）を塗って仕上げます。下の朱色を上ので漆を通して見せる透明感のある深い赤。

蒔地

ざらとした手触り。丈夫で金属製のカトラリーも使用可

黒



マット感のある落ち着いた黒。ざらとした感触、タフな仕上がり。マニッシュで、重厚感と温かみの両方の魅力があるキリモトならではの黒。

べんがら



インド・ベンガルの土の色に似ていることから、この名前（紅柄）がつけられました。温かみのある茶色のような朱。酸化第二鉄を使用して出来ています。

うるみ



古くからある茶色、潤。チョコレートのようなやわらかなシックで落ち着いた焦げ茶色。

さて、ここで学ぶべき一番重要なことは何でしょう？

それは、「わたし」がどんな暮らしをしていて、そこにすんなり収まる器を選ぶのか、それとも「こんな暮らしをしたい」というプランを持っていて、器がその暮らしを実現するための第一歩になるのかどうか…

そう、「わたし」の暮らしのスタイルを見直し、「わたし」にとつての「生活のものさし」を決めること、です。

今回のプロジェクトでは、最初の二ヶ月を「わたし」の暮らしを見つめ直す時間にあてます。

この間に、輪島キリモトでは、あなたの器の製作を始めるための準備をします。

じっくりと、あなたの生活のものさしで、あなたにいちばんフィットする暮らしを選んでくださいね。

今回、器のかたち、サイズ、塗りの種類、色、名入れなど、どう選ぶかにあたっては、このプロジェクトに参加申込みをしていただいた後、桐本さんの東京事務所・うるしの事務室で、実際に器を見て、触れていただき、どうするか選ぶ会を設けます。そこで見てから決めていただくことが可能です。

また、参加申込前に漆器でいただくおいしいお酒とお料理を楽しむ会（お食事とお酒の代金がかかります）を企画しています。こちらの会は、プロジェクトに参加されない方でも、漆器にご興味がある方なら大歓迎です。「漆器ってあまり使ったことないからわからない」「どうしようかな」と迷っておられる方もお気軽にご参加いただけます。

漆器の魅力をまずあなたの手と口とで確かめてみてくださいね。

* 器のかたち、色、塗りの詳細は弊社のホームページ腕でもご確認いただけます。携帯からもアクセスできます。よろしければ、こちらもご参照ください。

www.brand-ing.jp/utsuwa/



Step 4

名入れについて考えてみる（オプション）

今回輪島キリモトでつくっていただく漆器碗に、仕上げの最後に「わたし」の名前やイニシャルなどを、色漆や金文字で入れることもできます。入る場所は、お碗の裏、底、内側など…家族分読えるときに、目印が必要な…、「わたし」の記録として目印は必要な…、など考えてみましょう。

＊名入れオプションの価格：

色漆、5 文字まで 1,500 円（税込 1,575 円）

金色、5 文字まで 2,100 円（税込 2,205 円）

＊文字について：

粘着質のある色漆を使い、職人さんが手書きします。

＊名入れの作業自体は、実際には仕上げの一番最後に行われます。ご希望は仕上げ工程の前までに伺うことができます。

昔、おじいさんやおばあさんの代に揃いの器を読えた時、お碗の底の裏側部分などに家紋を入れてもらっていました。ちなみに、私の実家の紋は丸三つ引き。この際、自分の家紋が不明の方は（小出正三の実家は和菓子屋故、長岡藩にお納めしたお菓子の器に入っていた藩の御紋は覚えていても家の紋については覚えていない…）ご両親やご親戚に聞くなど、家紋をつきとめてみるのも一興。「いや、ご先祖様よりもっと自分らしいマークにしたい」そんなあなたは、これを機にシンプルな自分のロゴをデザインしてみてもいいですね。「わたし」の器をつくることは、「わたし」のブランドをつくること。「わたし」の暮らしの旗頭について考えてみるのもよいですね。



＊家紋やマークを入れるには、漆絵や蒔絵といった工程を追加する必要があります。漆絵と蒔絵は、ご希望の絵柄等により、仕上がり、納期、金額について、別途お見積りとなります。ご希望の方は、まずご相談ください。

2. 楽しむ 「わたし」の漆碗ができるまで

1. 見つめる

2. 楽しむ

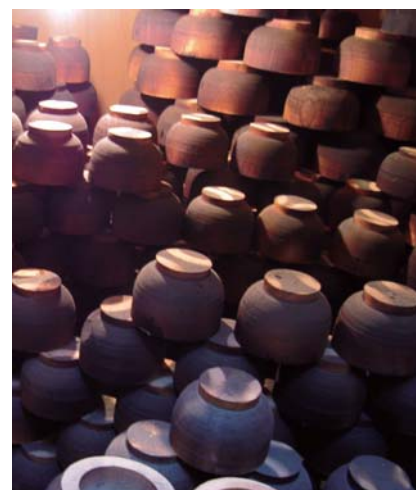
3. 愛でる

「わたし」の漆器ができるまで（本堅地の場合）は、約 22 に渡る工程を経ます。輪島キリモトの工房で作業が始まるまでも、材料となる漆が出来上がるまでとは別に関は何年かかる作業があります。

準備編

碗木地屋さんの仕事

今回オーダーするお碗のベースには、もちろん天然木を使用します。ケヤキなどの丸太を約 2～3 年、自然に落ち着かせます。その後、使用する形状の荒形を作ります。その荒形を燻煙乾燥室にて 24 時間一ヶ月燻煙乾燥します。次に空気中の水分を少し戻してあげるために 2、3 ヶ月床下に安置します。含水率が 13% ほどになってから、ようやく挽き物加工出来るようになるのです。このように長い時間をかけて落ち着かせることで、狂いの少ないしっかりとした器の基礎が出来上ります。木は生きています。湿度によって、微小ですが伸びたり縮んだりするもの。だからこそ、素材となる木に十分な時間をかけます。家を建てる時、「基礎が重要です」という話を聞きます。同じく、漆器碗も基礎が大事なんですね。



1 木地

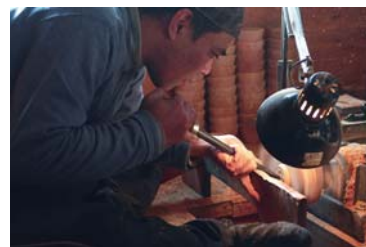
木地師さんの仕事

塗りが始まる前の木地づくりの工程段階で、輪島の工房を訪ねるツアーを予定しています。「わたし」の器の中身がどんな風に作られているのか、実際に目で見て確認してみましょう

重要 工程 1 木地づくり

最初の
削り

たくさんある荒型の中から、木地師さんは、これから削り出す器を思い浮かべて、器の素に適したこれと言う荒型を選び出します。ロクロを使って、荒型をお碗の形に挽いて（削って）いきます。今回のお碗はどれもシンプルでシャープな形状ばかり。実はこの形に削る仕事は、通常のお碗を削るよりも厚みの調整が難しく、コツがいるそうです。手の中に落ち着く形に仕上げることで、透けるほどに薄くなるまで挽くこと。それは一流の職人さんにしかできない技。ここの工程で、輪島の器のかたちの良し悪しは決まります。輪島塗り碗の軽く、薄く、手に収まるかたちは、木地師さんのこの挽く（削る）技術があってこそ叶います。



2 下地 -1

塗り師さんの仕事

*これからご紹介する漆塗り工程は、「本堅地技法」とよばれる工程です。

重要 工程 2 木地固め

最初の
漆ぬり

完成した木地に生漆（うるしの木からと採ったばかりの漆のこと）をしみこませ、木地の動きを固めます。木は生き物。温度や湿度で膨らんだり、縮んだりします。何年も乾燥させ落ち着かせた木を、更に生漆を塗ることで、更にゆがみや狂いが無い器に仕上げていきます。漆器が歪むことなく、ずっと使い続けられるのは、この工程がきちんと施されているからなんですね。



このように木地がつくれます。出来上がった木地は薄く、軽く、日に透ける程薄い部分さえもあります。これだけで十分に美しい木の器です。（写真は猪口の完成木地）

重要 工程 3 こくそ（刻苧）地

木地にケヤキの粉末と漆、米糊を混ぜた「こくそ」（刻苧）と呼ばれるものを塗ります。木地の表面の凸凹をなくします。



こくそ

輪島漆器商工業協同組合様サイト
(<http://www.wajimanuri.or.jp/>)
【私の目と心で感じた輪島塗り】より

重要 工程 4 木地磨き

最初の
磨き

漆の接着をよくするように、サンドペーパーで木地を磨きます。

重要 工程 5 布着せ

お碗の縁や、高台（底部分）、内側の床部分など、壊れやすい部分に、麻布や寒冷紗（綿布）を糊漆で張って補強します。布が張られることで、丈夫になり、何年にも渡って使い続けられるのです。歯が生え始める赤ちゃんが歯固めとしてかじるのにも最適！



重要 工程 6 布はつり

2回目の
削り

布着せした縁や、布が重なった箇所を削って、表面を滑らかにします。丁寧に削って、木地が凸凹しないように整えます。

重要 工程 7 惣身付け

2回目の
漆ぬり

布着せと木地との境目部分の段差をなくすために惣身漆（そうみつけうるし、生漆とケヤキの木粉を煎り炭化させたものと、生漆、米糊を混ぜたもの）を塗り、滑らかにします。



布着せの様子

重要 工程 8 惣身磨き

2回目の
磨き

サンドペーパーを使ってさらに磨きます。

3

下地 -2

塗り師さんの仕事

重要 工程 9 一辺地付け

3 回目の
漆ぬり

一辺地漆 * を木のへらを使って塗っていきます。お椀の縁など丈夫に仕上げたい箇所は、桧皮箆というヒノキの樹皮を叩きほぐして刷毛状にしたものでたっぷりと漆を塗りこみます。

重要 工程 10 一辺地研ぎ

3 回目の
磨き

砥石を使って空研ぎをします。

重要 工程 11 二辺地付け

4 回目の
漆ぬり

二辺地漆を一辺地漆同様に塗ります。

重要 工程 12 二辺地研ぎ

4 回目の
磨き

砥石やサンドペーパーを使って磨きます。

重要 工程 13 三辺地付け

5 回目の
漆ぬり

三辺地漆を同様に塗ります。

重要 工程 14 地研ぎ

5 回目の
磨き

砥石やサンドペーパーを使って磨きます。

重要 工程 15 めすり

6 回目の
漆ぬり

水練り砥の粉と生漆を混ぜた錆漆を薄く塗り、お椀の肌理を細かくします。

重要 工程 16 めすり研ぎ

6 回目の
磨き

砥石で水研ぎします。

薄く、軽やかに削り上げる木地、そして塗りと研ぎ・磨きを何度も繰り返す下地工程によって、滑らかな外観を持つ堅牢な器に仕上がります。滑らかで丈夫な器をつくるために、ここまでの工程で省ける作業は、残念ながらありません。



* 一辺地漆は、輪島の小峰山から産出される珪藻土（七厘の材料として有名）を蒸し焼きにし、砕いてふるい分けた「輪島地の粉」と生漆と米糊を混ぜたもの。粗い順に、一辺地粉、二辺地粉、三辺地粉と呼ばれています。



一辺地粉



二辺地粉



三辺地粉

だんだんと細かくなっています

4

塗り

塗り師さんの仕事

工程 17 中塗り

7 回目の
漆ぬり

中塗り漆を刷毛でぬります。

工程 18 中塗り研ぎ

7 回目の
磨き

青砥石または木炭で水研ぎします。

工程 19 小中塗り

8 回目の
漆ぬり

もう一度中塗り漆を刷毛でぬります。

工程 20 小中塗り研ぎ

8 回目の
磨き

丁寧に青砥石または駿河炭で水研ぎします。



中塗りと中研ぎ、小中塗りと小中塗り研ぎのどちらかの工程は省略することも可能です。コストダウンしたい時や製作時間を短縮したい時、つくり手さんに相談してみてください。

5 仕上げ

塗り師さんの仕事

重要 工程 21 拭き上げ

手で触った跡や汚れをふき取り、きれいにします。
この作業を丁寧に行うことで、美しく仕上がります。

重要 工程 22 上塗り

9回目の
漆ぬり

いよいよいちばん外側の表面の漆を塗る工程です。
ここで重要なことは、ホコリや細かいごみをつけないこと！
とにかくきれいな状態の上塗り漆を準備することが必要です。
そのため、和紙のように繊維が多い専用の紙で漆を漉します。
漆は粘り気のある液体のため、紙をまるめてぎゅっと絞り出します。
こうして、目に見えない小さなゴミも取り除きます。
漆を塗る刷毛も、もちろんゴミをとって、それから上塗りが始まります。

漉した漆を内側と外側との二回に分けて、刷毛目や埃をつけないよう
刷毛でぬります。上塗り用の刷毛には、女性の髪が使われています。
染めたり、パーマをかけたりしていない日本女性の髪が、漆の
粘り気と一番相性がいいそうです。

漆は塗り方だけではなく、塗った時の温度や湿度によって色合い
や風合いが異なる、生きている塗料。ですので、この工程では
その時々温度と湿度に応じて微妙な調整が必要とされます。
ですので、塗り師さんは、肌で感じた温度と湿度で、乾き具合や
色の変化を計算しながら仕上げていきます。

上塗りが終わったら、漆が垂れないように、回転風呂に置いて乾かします。



漆を漉しているところ(上)と上塗り(下)

塗り師の田中さんは、一年中、上半身裸
です。輪島でも、この方ただひとり。
体で温度、湿度を考え、漆の調整をする
からなのだそうです。

6 名入れ

蒔絵師さんの仕事 (オプション)

特別工程 名入れ、漆絵、または蒔絵

漆が完全に乾いたら、ご希望の方に、色漆、金文字で名前や
イニシャルなどをお入れします。
ひと筆ひと筆、色漆で描いていくのが漆絵。
その上から、金粉や銀粉を蒔きつけていくのが蒔絵です。

器を育てるプロジェクト第一段では、木地、下地、塗り、仕上げ、名入れ（希望者のみ）の工程が終了したら
輪島キリモトの工房から、メールまたは FAX で工程進捗レポートを配信してもらいます。

あなたがオーダーした器が、どんな風につくられていくのか、何のためにこの作業が行われているのかを、
実際にどんな工程を踏んだのか確認して学びましょう。

あなたが次に漆器を購入しようと思う時、注文しようと思う時に、これらの工程と意味を理解していることは、
値段と品質の確認に役立つことでしょう。

あなたの予算の範囲の中で、どれ位長持ちする器がほしいのか、どれ位見た目の美しい器がほしいのか、
一番優先させたいところは、素材なのか、塗りの回数なのか、など… あなたにとって、一番優先度の高いものを
オーダーできるようになるでしょう。また、もしもあなたがこの器を手放さなければならなくなったとき、
安価に買ったかたれないよう、あなた自身がこれだけの価値ある器であると強くアピールすることもできるでしょう。

せっかくの本物の器。あなたの財産として、価値を下げないために、ひとつひとつ理解していきましょう。

3. 愛でる 「わたし」の漆器碗を大事に使う

1. 見つめる

2. 楽しむ

3. 愛でる

器が完成して、いよいよ納品です。

その時、あなたの器と一緒に、輪島キリモトから届くもの、それは…

① メンテナンスマニュアル

洗い方、やってはいけないこと、気をつけてほしいこと、
もしも修理が必要になったときには… などが書かれています。

② 手数目録

「わたし」の器をつくるのに関わった職人さん全ての人の作業と
サインが記された目録です。
保証書でもあり、何よりもこれだけたくさんの手数と気持ちが
込められて出来ているという感動の記録です。

器ができるまでに、かかった手数とあなたと職人さんとのご縁の記録は、
保証書や銘よりも、あなたにとって本当に価値あるものとなるでしょう。
そして、輪島の工房にはあなたのために、

③ 器カルテ

あなたがオーダーした器の、素材、塗りの技法、色の仕様、
納品日などの記録

「わたし」の器をつくるのに関わった職人さん全ての人の作業と
サインが記された目録です。
保証書でもあり、何よりもこれだけたくさんの手数と気持ちが込められて
出来ているという感動の記録です。

このカルテが残されます。

もしも、器をぶつけて塗りがはげてしまった！なんてことが起きても、
輪島キリモトの工房で、迅速かつ適切な処置をしてもらえます。

また、あなたがもう一つ器がほしい、追加でお皿やスプーンを揃えたい、
と思った時にも、あなたの器にベストマッチの仕上げが可能となります。

納品後も、職人さんたちとの末永いお付き合いを大切にしてください。

なお、「わたし」の器が完成し、使い始めてしばらくたってから、
こんな企画も開催していきたいと思っています。

● 器同窓会 — あなたの器を持ち寄って、カフェパーティー

器を使い始めてから、たとえば1年後、それぞれの器を持ち寄って、
この器プロジェクトの参加者みんなでその器でおいしいお茶（コーヒー、
スープかも）を楽しむ会をいたしましょう。その時、桐本さんから、
メンテナンスのコツなどなどを教えていただきます。

● 輪島の工房からのお便り

輪島キリモトから、「いつものうるし通信」やおはがきが届きます。
これを機会に、長いよいお付き合いをおつづけください。

お申し込みから器の完成までの約 8 か月の流れ

もう一度、器を育てるプロジェクト第一弾の概要と流れを以下にまとめます。

Step 1

ほんものの漆器の魅力体験会

七月下旬から八月前半のどこかで、輪島キリモトの器で楽しむおいしいお酒と黒豚料理の夕べ（会費別途）実際に、漆器の器でビールやお酒、お料理をいただき、輪島キリモトの漆器の良さを体感してみましょう。

＊ 7/30（木）午後7時から、または 8/6（木）午後7時からを予定しています。参加希望者の多い方で実施する予定です。

Step 2

お申込み

FAXまたはEメールでお申し込みください。詳細は16ページをご覧ください。

Step 3

スケジュール表送付

参加者各位に、お支払方法、スケジュール表を送付いたします。

Step 4

仕様確定

漆器碗の種類、サイズ、手法（本堅地か蒔地か）、塗りの色など、内容を選択します。輪島キリモト東京事務所・うるしの事務室にて、サンプルを確認して選ぶことができます。スケジュールの都合がつかない場合は、メールやFAXで希望を伺います。

Step 5

お申込み費用のお支払

お申込費用として、器製作費の半額をお支払ください。ここでのお支払いいただくお金は、輪島キリモトで器をつくるための材料調達の費用にあてられます。

Step 6

輪島の工房で器の製作開始

いよいよ輪島の桐本木工所にて、職人さんが器の製作を開始します。ご希望の方を対象に、木地づくりの段階で輪島の工房見学を実施します。（旅費、宿泊費別途）

Step 7

製作工程進捗情報配信

各工程が完了するごとに、輪島キリモトから工程進捗情報が配信されます。この工程チェックを通して、漆器ができるまでの工程を学び、漆器の見分け方を身につけましょう。

Step 8

器完成

約六カ月後、器が完成します。

Step 9

器のお披露目会

完成した器を東京うるしの事務室で受取ります。器、手数目録、メンテナンスマニュアルが手渡されます。その時、メンテナンスについてのかんたん勉強会を実施します。

Step 10

製作費残金のお支払

納品時に、漆碗の製作費の残金をお支払ください。

Step 11

毎朝ハッピーライフ開始

「わたし」の器を使い、毎朝ハッピーな気持ちで一日をスタートさせてください。

Step 12

器プロジェクト同窓会、輪島キリモトからのうるし便り

後日、器を持参して、カフェパーティーを開催します。また、輪島キリモトから【いつものうるし通信】や企画展のご案内などが届きます。器を使いながら、器とも桐本さんとも長い付き合いをお願いいたします。

器を育てるプロジェクト第一弾 一日の始まりだから、しあわせをいただく 募集要項

今回は第一回目、実験的な取り組みでもあります。私たちの考え「つくり手も買い手もオープンな環境でお互いに学びながら、
「新しい価値をつくっていこう」にご賛同いただき、ご協力いただける方を募集いたします。ぜひご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

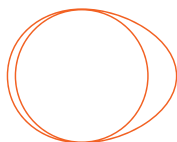
	「器プロジェクト」	「漆器でいただく美味しいお酒とお料理」
募集人数	30 名 *お一人で複数個お申し込みいただくことも可能です。	30 名
成果物	- 仕様書（形、サイズ、塗りの手法、色、名入れなど） - 工程チェックシート - 輪島キリモトからの工房進捗レポート - 輪島キリモト製漆器碗 - 手数目録 - メンテナンスマニュアル	
費用	1 個あたり、約 15,750 円～25,200 円 （仕様によって異なります） *費要は日本橋三越「スピリッツ」で販売されている漆器碗の価格と同じです。 名入れ、漆絵、蒔絵については、別途お見積りいたします。 *仕様確定後、制作費の半分をお申込費要としてお支払いいただき、 正式な発注となります。 *器が完成し、納品時に残金をお支払ください。 *上記価格に、有料イベント代は含まれません。	一名様 5,000 円 *お食事代、お飲物代が含まれます。 *会場は、東横線学芸大学駅近くを予定。
スケジュール	- 製作前準備期間 2 か月 - 漆器製作期間 6 ヶ月（名入れ・漆絵・蒔絵工程を除く） *漆器碗の納品は 2010 年 3 月頃を予定しています。	*参加者数の多い方の日程を優先します。
募集期間	2009 年 7 月 11 日～2009 年 9 月 30 日 *スケジュールは予告なく変更する場合がございます。ご了承ください。	2009 年 7 月 11 日～2009 年 7 月 23 日
申込先	- E メール utsuwa@brand-ing.jp タイトルに「器プロジェクト」 本文に ①参加者名、②希望の漆器碗制作数、③昼中連絡先電話番号 を記入し、送信してください。 または - FAX 0467-60-6313 ①参加者名、②希望の漆器碗制作数、③昼中連絡先電話番号 を書いて、送信してください	E メール utsuwa@brand-ing.jp タイトルに「漆器体験」 本文に ①参加者名、②希望スケジュール、 ③昼中連絡先電話番号 を記入し、送信してください。
パートナー	輪島キリモト 桐本 泰一氏 http://www.kirimoto.net/	
サポーター	ブランドロジスティクス有限会社 かしこ担当 小出 ユリ子	



このプロジェクトにご興味を持っていただけそうなご友人やお知り合いの方がいらっしゃいましたら、
不易流行通信 No31 をお送り致しますので、配布先を下記の hello@brand-ing.jp まで E メールでご連絡ください。
どうぞ宜しくお願いいたします。



漆碗につづき、より生活に特化した「お酒を楽しむ器」「極上のお茶を楽しむ器」「大好きな日本の色でリビングを
揃えたい」等のテーマで第二段、第三段のプロジェクトを展開していく予定です。この企画にご協力いただける
つくり手さん、サポーターを募集しています。器の輪（ネットワーク）をぜひ私たちと一緒に広げていきませんか？
お問い合わせは、下記の hello@brand-ing.jp まで。お気軽にコンタクトしてください。



Brand logistics Co.Ltd.
インサイトをエキサイト!

2009 年 7 月

本誌記載の記事の“無断転載”“無断複製”を禁じます。配付を希望される方は、
下記までご連絡ください。また、本誌に掲載されている各社の社名、商品名、サービス名、
ロゴ、シンボル等は各社の商標または登録商標です。

発行所◆ブランドロジスティクス有限会社

発行人◆小出正三

ご意見・ご感想・お問い合わせは、hello@brand-ing.jp

〒248-0013 鎌倉市材木座5-8-39 tel:0467-60-6312 fax:0467-60-6313